

## フリードリヒ・シンケルによるベルリンの旧博物館装飾壁画に関する考察

三井麻央(岡山大学)

1830年に開館した旧博物館は、ドイツで建設された最初の博物館専用の建造物に数えられる。その外壁を飾った装飾壁画は、神話の神々の世界から人間の世界への移行を主題とし、旧博物館の建築家フリードリヒ・シンケル(Carl Friedrich Schinkel, 1781-1841)の構想ののち、画家ペーター・フォン・コルネリウス(Peter von Cornelius, 1783-1867)らによってフレスコで描かれ1848年に完成した。本発表はシンケルによるこの装飾壁画を、単なる装飾として捉えるのでもなければ、単独の作品として文脈から切り離して考えるのでもなく、博物館全体のプログラムや理念を踏まえた上での役割という観点から捉え直したい。ファサードの大部分を占める装飾壁画は、館の理念を伝える一要素であるのみならず、そこに描かれた世界のサイクルという主題は、ベルリンでのちに建設される博物館の装飾にも継承され続けるため、博物館建築史においても検討に値するだろう。

旧博物館の開館時、シンケルはプロイセンの建築参事官および旧博物館設立委員会の構成員を務めており、建築のみならず装飾や展示方法に至るまで、設立の準備段階から館の方針を定める中心的立場にあった。そのため、装飾壁画に関する先行研究は、シンケルの広範な事績の一部として旧博物館研究の一角をなしているものの、主題の同定や制作過程への言及にとどまり、博物館プログラム全体との関係性の指摘に乏しい。だが、博物館の記念碑的役割を象徴するものとして頻繁に言及される列柱廊やロトンダなどの建築モチーフ、そして展示空間との関係性から装飾壁画を再考すると、旧博物館の装飾壁画は、館内よりもむしろ館外の都市景観との対比において見られるべき作品であることが明らかになる。

さらに、旧博物館と同年に開館し、同じく神々から人間の世界への移行をあらわす装飾壁画をもつミュンヘンのグリユプトテークとの比較により、その役割はより明確になる。グリユプトテークの装飾壁画が展示の流れに沿って、館の最奥部で記念碑的な空間を形成したのに対し、旧博物館の装飾壁画は館内部に干渉しない。加えて、当時のベルリンにおける都市景観の主題や、ディオラマ制作を始めとするシンケルの他の活動からの影響を鑑みると、旧博物館の装飾壁画は館内外を隔てる境界の役割を果たしていたと指摘できる。先行研究で旧博物館はグリユプトテークとともに、ドイツにおける新古典主義の理想を实践したミュージアムとして例示されてきたが、発表者は両館が装飾壁画にそれぞれ異なる機能をもたせていたことを示したい。

以上のように、旧博物館の装飾壁画は他の建築モチーフと協働しつつ、外部との境界という独自の役割をもっていたことを明らかにした上で、旧博物館をこれまでとは異なる見地から位置づけることが、本発表の最終的な目的である。